

伊達政宗弟・小次郎の討ち死説の真偽

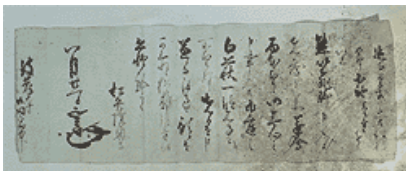
2019 年 4 月 【改3】 佐藤正喜

伊達家の正史『貞山公治家記録』では政宗によって手討ちされたことになっている弟・小次郎の死の真偽に関する資料を集めて考察を試み、最後に私見として纏めてみた。

1. 既知の史実・・・大悲願寺 15 代住職法印秀雄^{しゅうゆう} は伊達輝宗二男にして政宗弟

東京都あきる野市横沢の真言宗の古刹大悲願寺(金色山吉祥院大悲願寺)に一通の伊達政宗の書状が伝えられている。元和8年(1622)8月21日、当時的大悲願寺十三代住職海誉上人に宛てた手紙である。内容は、寺を訪れた政宗が庭に咲いていた白萩の美しさに惹かれ、江戸に戻り使者を立て株分けを所望したもの。寺では、『伊達政宗白萩文書』と呼ばれ、今も大悲願寺に保存されている。

なお、海誉上人は徳川将軍に重用された天海や崇伝と並ぶ人物と云われる。
この白萩、今も秋になると見事に咲く。大悲願寺は白萩の寺としても知られる。



東京都有形文化財 『政宗白萩文書』



白 萩



宮城の萩



同寺の歴代第 15 代住職に法印秀雄という人物がいる。秀雄は海誉上人の弟子だった方で、[寺の記録によると伊達政宗の弟](#)なのだ。政宗が元和8年に寺を訪れたのも秀雄に会うためだった、と地元では言われているという。『政宗白萩文書』の包紙には、「秀雄が伊達左京大夫輝宗の末子で、政宗の弟であり、幼名を鶴若と称した」ことが記されている。

これを書いたのは、第24代住職の如環とされるが、一方、『金色山過去帳』(東京都指定文化財)にも「法印秀雄、俗世は伊達大膳大夫輝宗の二男、陸奥守政宗の舎弟也」とあり、伊達輝宗の二男で政宗の弟である、と明記されている。この過去帳は建久2年(1191)から明治21年までのもので三巻からなり、初期の分は如環が江戸時代中期に整理したものであるという。

過去帳によれば、秀雄の住職在任期間は寛永 12 年(1635)9月から翌年6月までの約 10 ヶ月。この間、寛永 13 年 5 月 24 日の政宗の命日を記し、自ら回向を行ったと記している。そして、その中で政宗のことを「伊達左京大夫輝宗の嫡子、沙門秀雄の兄」としているのだ。秀雄はこの直後に大悲願

寺を去り、現在中野区(中野坂上)にある同じ真言宗の明王山宝仙寺に移り、第14代住職となった。ここで、寛永 19 年(1642)7 月 26 日に亡くなった。享年未詳。宝仙寺に墓がある。



大悲願寺 山門



宝仙寺 山門



宝仙寺 三重塔

この秀雄なる人物は伊達家伝来の系図、記録類には一切現れない。系図では政宗には弟一人と二人の妹がおり、いずれも父輝宗と母義姫との間に生まれた子供である。妹二人は夭折し、弟小次郎(幼名は竺丸)は天正 18 年 4 月 7 日、母義姫による政宗毒殺未遂事件に絡んで政宗により手討ちにされたことになっている(『貞山公治家記録』)。

秀雄が輝宗の二男で政宗の弟であるとするなら、秀雄が小次郎ということになる。その可能性はあるのだろうか。昭和 51 年刊行の『五日市町史』では、系図に秀雄の名が見えないことから、輝宗の異腹の落胤ではないかと常識的な推測をしている。

★『寛政重修諸家譜』では、「父輝宗、母義姫、政宗、弟某(幼名 竺丸、小次郎。故ありて兄政宗に殺害せらる)、妹は二人」と記されている。

2. もう一つの史実・・・手討ちにされた小次郎とその傳役もりやく・小原縫殿助の墓、その記録

元禄 16 年に編纂された貞山公治家記録では、4 月 5 日「母義姫から小田原陣立ちの祝い膳に招かれた政宗への毒盛り事件」、同7日「母とその背後の最上家の陰謀を感じ取った政宗が、伊達家の分断を避けるため、元凶である小次郎とその傳役・小原縫殿助を手討ちにした」ことが記されている。

貞山公治家記録編纂のよりどころとなった史料に事件当時の伊達家の日記『伊達天正日記』があるという。それによると、天正 18 年4月7日、「政宗の黒川城(のち会津若松城)の屋敷に参上した小次郎の傳役・小原縫殿助が、政宗に手討ちされた」ことが記されている。しかし、小次郎手討ちについては記述がなく、この日以降の日記には小次郎の名はでてこないという。

ところで、小次郎と傳役・小原縫殿助の墓が宮城県登米市津山町横山の右年山にあるという。菩提寺は舍那山長谷寺。墓碑は明治 26 年に建てられたもので、長谷寺に伝わった小次郎埋葬に関する旧記(寛政2～5年)及び平成元年刊行の「津山町史」によると、小原縫殿助は小次郎の遺骸を擁して密かに黒川城を出た後遺骸を初め福島某寺に埋葬した。その後、天正 19 年政宗の岩出山移封に伴い旧葛西・大崎領が政宗の領地になると、小原は小次郎の遺骸を文禄元年(1592)この地に改葬し、自らも殉死してここに埋葬された、としている。横山の地は政宗が化粧領として母義姫に与えた所で、小次郎の改葬は母の内命によるものだろうと推測されるという。

小原は生き延びて小次郎の埋葬にあたったことになり、「伊達天正日記」、従って元禄の編纂「治家記録」の記述と異なることになる。★公式、非公式の記述の使い分けに矛盾はなく、下記の8代藩主齊村公による供養の話も加えると、小次郎君の手討ちは対豊臣の情報戦略であったとする説が有力になってくる。

平成6年津山町教育委員会の現地説明標「伊達小次郎君の墓所の由来」には、上記の町史の内容に加えて、「七代の勘当が解かれた寛政5年2月に、8代藩主斉村公は名代を遣わし供養した」と記している。小次郎君の墓碑正面(写真①)は「奥州大守口中口口政宗公口 伊達小次郎君墓」、側面(②)は「天正十八口年口月七日」と読める。③は小原縫殿助の墓であり、手厚く葬られた様子を伝えている。



小次郎墓碑①



同②



③小原縫殿助の墓



現地説明標

3. 伊達家の分断を避けるためとした弟殺害が腑に落ちない、政宗と母義姫との手紙からの推測

大悲願寺に残る記録(『政宗白萩文書』、『金色山過去帳』)、幕府を意識した伊達家の記録(『伊達天正日記』、『貞山公治家記録』)、政宗が母義姫と交わした手紙の研究(仙台市博物館長佐藤憲一)から、[佐藤憲一氏はその著書『素顔の伊達政宗』、2012年2月、洋泉社発行](#)において、次のように指摘している。

①治家記録では、事件が発覚した天正18年4月7日に母義姫が米沢に出奔したとしている。

このあと、母に宛てた手紙が全部で7通知られているが、いずれも親子の情愛を感じさせる内容で、事件のわだかまりを窺わせるものはひとつもない。特に、文禄3年11月27日、政宗の師である虎哉和尚が岩出山から京都にいる大有康甫和尚(伊達植宗の十三男、政宗の大叔父)に宛てた手紙は、示唆に富む内容である。この手紙の中で、虎哉は「政宗の母堂が今月4日夜、最上に向かって出奔しました。お聞き及びですか」と述べている。この史料によれば、母の出奔が文禄3年11月4日、会津黒川城でなく岩出山城からであることが明らかになった。これにより、

②事件後も義姫は政宗とともに黒川城から岩出山城に移り住み、文禄3年11月までは二人の間で手紙の交換が可能であったことが理解できる。義姫が毒を盛ったとするなら、事件後も政宗のもとに居続け手紙をやり取りしていることになり理解に苦しむ。

治家記録は伊達家の正史としての作為(対、豊臣閥白)があったと思われる。

③以上から、母は本当に政宗に毒を盛ったのか、政宗は本当に唯一の弟小次郎を殺害したのであろうか、という疑問が増幅してくるのである。

④大悲願寺の現住職加藤章雄氏によると、前住職である父章一氏は、寺に伝わる話として次のように話していたという。「鶴若(秀雄)は頭がよく、政治にも口を出す弟だった。政宗の政治への口出しを心配した母義姫の計らいで、政宗は徳川家康へ鶴若を託す。家康と親しい増上寺の観智国師は甥で大悲願寺の住職であった海誉上人に鶴若を託したのだ。たった一人の弟を殺すことは伊達家の血統を絶やしかねない。そんなことをする訳がない」と。

この話の注目すべき点は、弟小次郎の処分は政宗と母の共謀だったという点だ。

⑤当時、政宗にはまだ実子がおらず、長男秀宗が誕生するのは翌年である。小田原での秀吉との謁

見は命懸けであった。血統を絶やしかねない、たった一人の弟の殺害は考えにくい。手討ちにしたことにして小原縫殿助に託して密かに逃がした、と、考えられないだろうか。

★政宗と家康の人的ネットワークは、天正 18 年岩手沢城(後の岩出山城)の縄張りを家康が行った頃から強力なものになっていたと考えられる。また、江戸進出時に源譽存応上人に帰依した家康は、天正 18 年増上寺を徳川の菩提寺にしたこと、天正 19 年、大悲願寺に武蔵国多摩郡秋留郷横沢のうち20石を与え、家康朱印状写が寺に残っていることが、『大悲願寺の古文書調査報告(あきる野市)』に掲載されている。政宗から相談された家康は、増上寺の観智国師を通じてその弟である大悲願寺住職海誉上人に小次郎を託したとする指摘は可能性が高い。

4. 秀雄は小次郎か

秀雄を小次郎とする確証は今のところはない。しかし、大悲願寺の史料、就中、過去帳を見れば、秀雄が政宗の弟であることは疑いようがなく、小次郎と同一人物である可能性が高い。

その後、小次郎が大悲願寺にたどり着くまでの経緯は不明である。ただ、中野の宝仙寺の元禄 14 年縁起によると、秀雄は年少にして仙台の龍宝寺に入り、その後奈良の長谷寺に登って勉学に励んだとある。龍宝寺は、伊達家の祈禱所を務めた真言宗の寺であり、梁川、米沢、岩出山を経て慶長3年(1598)伊達政宗により仙台城北の八幡(青葉区八幡)に移創したといわれる。仙台の龍宝寺とあるのは、いわゆる天正18年(1590)4月の事件直後のことであろうから、米沢の龍宝寺の誤りであろう。

★秀雄が学んだのは龍宝寺HP記載の歴史にみるように米沢時代の龍宝寺である。

「真言宗 恵沢山 龍宝寺(もと大崎八幡神社の別当寺)。仙台市青葉区八幡 4-8-32。

創建は大崎八幡宮と同時期の平安期で坂上田村麻呂によるものと推察される。

文治2年(1186)伊達一世朝宗が常陸中村に再興して自家の祈願寺とした。その後、伊達家に従い梁川、米沢、岩出山を経て慶長3年(1598)伊達政宗により城北の当地に移創。八幡宮落成の際にはその落慶法要を勤めた。寺領270石を附された一門格寺院。城下最大の門前、龍宝寺門前を有した。」

5. 私 見

政宗毒殺未遂事件、政宗による小次郎手討ち、大悲願寺の法印秀雄、小次郎・小原の墓を巡り、政宗の弟小次郎の討ち死説の真偽を推論してみる。

政宗はこの時代において優れた戦略家としての資質をもっていたと言わざるをえない。若輩政宗が、時の権力者秀吉に何度も嫌疑をかけられながら、白装束での謁見、金の十字を背負った謁見など、老獪で人たらしの秀吉を相手に、いい意味で人を食う「食らわば食らえ」とばかりに秀吉に対したという構図が浮かぶ。秀吉の老獪な欲望(凸部)を若輩政宗が智謀(凹部)で受け止め、政宗の実力があたかも潤滑剤となり、秀吉に政宗の強さを認めさせたと見ることはできるのではなかろうか。

こうした前提をもとに思考を進め、「秀雄は小次郎に限りなく近いか同一人物である」という見解にたどり着いた。

①小田原参陣をこれ以上遅らせてはならない時期にも関わらず、家内の意思が秀吉恭順派(片倉小十郎)、徹底抗戦派(伊達成実)に分かれていた。結果的には、知将片倉小十郎景綱の「蠅は追い払っても付きまとう」との意見を入れて参陣することになったが、遅れた言い訳に、戦略的な芝居

を打ったというのが最も単純な推論。即ち、母による政宗毒殺未遂、政宗による小次郎手討ち、いずれも事実ではなかったということ。

伊達家の血統を絶えさせる訳にはいかず、弟小次郎を手討ちにしたことにして、傳役・小原縫殿助に託して密かに逃がしたというものであろう。すなわち、政宗は徳川家康へ小次郎(鶴若)を託し、家康と親しい増上寺の観智国師は甥で大悲願寺の住職であった海誉上人に鶴若を託した。

小次郎は、法印秀雄として大悲願寺第15代住職、中野の明王山宝仙寺第14代住職を経て宝仙寺にて一生を終えた。

- ②小次郎の墓は、宮城県登米市津山町横山の右年山にあるが、傳役・小原縫殿助の墓と同じ場所である。戦国の世、傳役を勤めるくらいの家臣にとって、伊達家のために小次郎君の大悲願寺預けのカモフラージュに、これくらいの知恵を働かせるのは訳もないことであろう。現在の墓碑は明治26年に長谷寺住職らにより建立され三百年の大法要を行ったという。小次郎埋葬に関する旧記と墓の存在、寛政5年の斉村公による供養の言い伝え等は、小次郎の生存をカモフラージュする伊達家正史としての貞山公治家記録と同様に、何ら矛盾するものではないと考えてもよいのではないか。

以上

【補足資料】

★『伊達政宗白萩文書』の口語訳

わざわざ飛脚を立てて申し入れます。この間、そちらへ行ったときにはお会いできて満足でした。頼みたいことがあるのですが、あの時、庭の白萩がひととき見事だったので少し分けてもらいたいのです。先日は言い出せなくて、そのまま帰ってきて今まで過ごしてしまいました。頂戴できればありがたく、うれしいです。とり急ぎ一筆したためました。謹んで申し上げます。

追って、こればかりの品ですが、間に合わせて小袖をひと重ね進呈します。

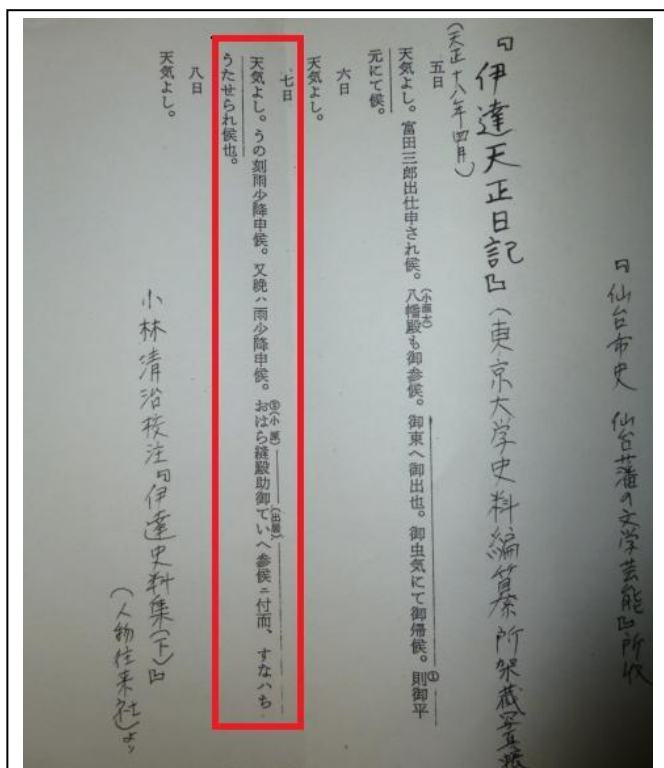
以上

松平陸奥守 八月廿一日 花押 彼岸(悲願)寺御同宿中

★『伊達天正日記』

[伊達小次郎殺害はお家安泰のための偽装？ \(歴史\) - KR500 レプリカの部屋 - Yahoo!ブログ](#)

傳役・小原縫殿助手討ちの記述(4月7日)



★秀雄の墓 東京中野坂上 明王山 宝仙寺

墓碑銘 「当寺第 14 代 法印大僧都 秀雄」が読み取れた。

2019.3.31 訪問

